



充実した1年を終えて夏休みへ

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

もっと手を出そうと決意

前回の実習では自信がつくのを待って手を出さずに見ていることがほとんどだったので、今回の「実習2」では自信のつくのを待っている時間はない、と手を出すことを決めた。コミュニティでメンターのパムも押してくれて、私主体で、パムは後ろでサポートするという体制で仕事ができるようにしてくれた。そのおかげでまだ自信がないながらも、初診、妊婦検診、産後の家庭訪問でどんどん手が出せるようになった。分娩室実習ではマンディが第一ステージの産婦さんとパートナーと私を分娩室に残して、「じゃあお茶を飲んでくるから、何かあったらブザーを押してね」と出て行くことが増えた。先輩が同室にいるんじゃ自由に産婦さんに接することができないから、という助産婦歴2年のマンディならではの配慮からだっただけ、確かに一人だと自分主導で産婦さんとの関係も作ろうと努力する。マンディが横にいるのといないのとでは大きな違いがあると気づいた。

この実習中に一度だけ、生まれてくる赤ちゃんの頭に手を添えて、そのまま生まれた赤ちゃんをお母さんのお腹の上に乗せるということをした。手を添える＝「介助」と呼ぶのだとしたら介助した、ということになるけれど、実感はなかった。手はあったけれど、産婦を支えたのは私じゃないしメルだったから。次回9月の実習では分娩室が主なので、お産の介助をもっと経験できるんじゃないかと期待している。

引き離された母児

初めて、実習中に悲しいことに直面した。妊婦のジョーの検診を一度したことがあって、助産婦たちの会話の中に時々出ていたので私も事情は少し知っていた。ジョーとその家族こそ知らされていなかったけれど、ジョー夫妻は問題があって、子育て能力がないと判断されていたため、赤ちゃんが生まれたら3日後の退院と同時に福祉課と警察が介入、母子は引き離され、赤ちゃんは里子に出されることが決まっていた。

確かにジョーの検診を思い出すと、実習を始めたばかりで私がとっても緊張している上に、ジョーと夫はこっちを居心地悪くさせる要因を持っていたし、夫がとっても威圧的で、今まで会ったことのないタイプのカップルだった。

ジョーが退院した翌日、パムと一緒に自宅訪問をした。パムの顔を見てジョーは泣き出し、しばらくパムの肩に顔を置いて泣いていた。翌日には裁判所へ行って詳しく話を聞くことになっているらしいが、ジョーにどれだけの説明がなされているのか、彼女がどれだけ状況を理解しているのかが、とても疑問だった。

子供の将来を最優先して考えると、これが最良の方法、という判断は理解できる。でも、3日間一緒に入院させたのは酷だ、というのが今回ジョーに関わった助産婦たちの一致した意見だったので、福祉課の決定には疑問が残った。産前からこの決定のことを私も知っていたの

で、今回の件に何か荷担したようで、ジョーを裏切ったような気持ちになった。自宅訪問を1度した後、私の実習が終わってしまったので、ジョーと赤ちゃんがそれからどうなったのかはわからない。

引越し

私は家をシェアしているカップルとの同居に不満を感じ始めていて、ちゃんと独立したかった。友人も増やしたいし、家賃も安いほうがいい。学生並みの生活をしようと決心して、6月末、病院付属の学生寮に引越した。

“学生寮は狭くて汚くてうるさいから、絶対避けたい”と思っていたのに、入ってみると悪くなかった。各部屋に机、イス、本棚、ベッド、タンス、ワードローブ、洗面台が備え付けてあって、台所、トイレ、お風呂、電話は共同。6人で一つをシェアする。私の部屋はラッキーにも普通の部屋の1.5倍の広さ。それに両隣が物置なので、壁を挟んで隣の音に悩まされることもない。もっとも学生は皆違うシフトで働いているので、迷惑になるような騒音は立てない配慮をしていると感じた。

同期の看護、助産学生は全員2月の実習開始と同時に隣の病院付属寮へ入ったので、この寮に顔見知りほとんどいない。その分、病院の人材不足から年初めにフィリピンからやってきた看護婦(士)19人の存在は、同じアジア人だけに、お互い親近感が沸いてうれしかった。

確かに台所の汚さにはうんざりしてしまう。使った食器をどうしてすぐに洗わないんだろう？ 何日放置しても平気なイギリス人学生たちをやっぱり理解できない。クラスメイトにそのことを言うと「汚いのにもそのうち慣れるから」と励ましの返事が返ってきた。それでも涼しいイギリスの気候が幸いしてハエはほとんど見ないし、ゴキブリは皆無なのでまだましかな。そう思うこと自体、環境に適応し始めた証と考えると怖いけれど。



2000年9月入学、ダイレクトエントリーで助産婦になるクラスメイトたち。左端が筆者。卒業まで、あと2年。

バイトを変える

先のバイトに不満を抱えていたころ、2001年2月入学の看護学生アリーと大学で会った。その場で彼女は自分のバイト先である婦人科を紹介してくれて、週末には申込書を手配してくれた。面接を受けて週1回のバイトが始まった。時給は派遣より落ちるけれど、助産と関連づけて学べることはたくさんあるし、私はその病院の敷地内に住んでいるので通うのにとても便利。

人との接し方一つでもこの仕事を通して学ぶことがたくさんある。病院の環境になれて自信をつけるためにも、役立っていると感じた。「やり過ぎないでね」と忠告しながら指導教官も応援してくれるし、メンターのパムが「バイトを始めてから人との接し方が変わってきたわよ」と察してくれてうれしかった。

夏休み目前

6週間の実習の後、4週間だけ大学に戻って、栄養学、微生物学、コミュニケーションと、看護学生と合同の科目3つの講義を集中して受けた。次の課題締め切りまではまだ3か月あるし、心はもう夏休みに向いていたけれど、時々我に返って、ものすごい速さで過ぎていったこの1年で何か進歩はあったのだろうか、これから2年間やっていけるだろうかと不安になった。